

平成 30 年度アーバンデザインスクール(第 4 回)

“快適に歩ける歩行空間のデザインって !?”

-「東海道統一案内看板制作プロジェクト」の試みと「近江の懐」取材より-

2018 年 9 月 29 日(土)10:30~12:00 (UDCBK 西友南草津店)

成安造形大学 芸術学部 地域実践領域 准教授 附属近江学研究所研究員 石川 亮

1. 「東海道統一案内看板制作プロジェクト」の試み

東海道(ストリート)の潜在能力を活かした地域の活性化とその繋がり

・デザイン制作プロジェクト:2016.04.~08. 2016.12. 完成

成安造形大学×大津市まちづくり計画課・草津市都市計画課

・東海道統一案内看板専門部会:2017/04.~現在(継続中)

大学、建築士会、広告美術協同組合、博物館、商工会議所、商店街連合、観光協会など計 15 団体

・デザイン制作プロジェクト:2016.04.~08. 2016.12. 完成

依頼内容

大津市と草津市は琵琶湖を挟んで対岸に位置し、隣接していることから良好な景観形成を目指す連携協定を結んでいる。これは自治体(行政)の垣根を越えて取組む全国でも特筆すべき取組みと言えよう。その糸口として両市を貫く一本の道、「東海道」を一つの統一したデザインで表現するサイン計画の提案が我々に依頼された。

取組みの思考プロセス

- ①主旨の理解(empathize 1)
- ②実地調査・フィールドワーク(empathize 2)
- ③問題点や気付きのピックアップ(define)
- ④解決策の創造と提案(ideate)
- ⑤方向性確認の対話(dialogue)
- ⑥試作の提案(prototype/presentation)
- ⑦実施テスト(test)※今後の大津市と草津市の計画と展開

東海道統一案内看板デザイン コンセプト

大津市から草津市へと繋がる 1 本の道、東海道は古の時代から近代化が進み、鉄道などの交通インフラが成立するまで日本の中枢を担うメインストリートであった。今日も江戸期の面影を残す場所を残しながら生活の道として現役の道である。また浮世絵の題材となった「近江八景」や「東海道五十三次」に描かれた情景は、我々が望むべき景観の様相と言えよう。

このような歴史的背景があり潜在能力の高い東海道に、統一したデザインの案内看板を設けることで、地域住民や行き交う人々の興味関心を高め、景観保全の意識向上につなげたい。

案内看板のデザインは木材や鉄といった原素材を使い、丈夫であり長年使用可能で、時と共に風合いが増して行く事で景観に馴染む様に考えている。更にこの提案を多くの東海道沿いの方々にご理解いただき、大津から京都方面へ、草津から東京方面へつながることを希望する。

新しい案内看板を提案する事で両市が掲げる市民憲章にあるように、豊かな文化財をまもり、古い歴史にとけあった新しい文化をつくりたい。

その事によって、旅の人をあたたかく迎える気持ちが生まれ、環境を整え、次世代に繋げるあるべき風習につながっていくと考えている。

・東海道統一案内看板専門部会:2017/04.~現在(継続中)

2017 年度の活動

- ・大津市、草津市にてモデル看板の制作および設置
- ・統一案内看板コンセプトの確認
- ・統一案内看板のあり方、展開について

2018 年度の活動

- ・大津市、草津市間における次期看板設置場所の現地視察(膳所、石山界限)
- ・統一案内看板ルールづくり→ルールの手引き作成へ
- ・統一案内看板の周知方法→広め方の手引き作成へ

① 来訪者の視点、②地域住人の視点、③景観保全の視点

びわこ大津草津景観推進協議会へ活動報告する。(2018/11)

成安造形大学、滋賀県建築士会大津地区委員会、滋賀県広告美術協同組合、大津市歴史博物館、大津市商工会議所、大津市商店街連合、びわ湖大津観光協会、旧東海道まちなみ整備検討委員会、日本建築家協会滋賀地域会、滋賀県建築士会湖南地区委員会、草津市観光物産協会、草津商工会議所、草津街道交流館、大津市まちづくり計画課、草津市都市計画課 計 15 団体

2.「近江の懐」取材より

宿場町の持つ包容力と歴史性に裏付けられた新たな場(プレイス)の展開

「近江の懐」探しは以前から手を着けたかった仕事のひとつである。これまで「近江の水」を巡り今日も持続しているのだが、命の水の周辺には必ずと言って良い近江の暮らしの中から生きづく生業がある。その周辺にはハイクオリティの手技やその精神が脇を固めその生業を成立させている様に思う。水を巡りながら横目にそれらを見付け、「いつかは突っ込んでみたい！」という思いを抱いていた。また2013年から2016年にかけて滋賀県のブランディングに携わるお手伝いや自らその潜在能力を掘り起こす事業に携わる機会が与えられた。その結果は一言で言うと「恐るべし近江の潜在能力！」だ。こちらから探さずとも街道沿い、宿場を軸に進むと自ら迫ってくる。私はその迫ってくる「何か」の周辺でそれを引き立て、支え、受継ぐ脇役に迫りたい。それらは決して脇役ではないがその懐近くで支える「ハイクオリティの手技や精神」に焦点をあてたい。

近江の懐

① 大津の茶櫃(ちゃびつ)	東海道	大津宿(茶舗・中川誠盛堂)
② 海津の木桶	北国海道(西近江路)	海津宿(魚治)
③ 木之本の酒蔵	北国街道	木之本宿(富田酒造)
④ 八日市のジーパン	御代参街道	八日市宿(CONNERS SEWING FACTORY)
⑤ 長浜の看板	北国街道	長浜 城下町(看板・景観広告)
⑥ 水口の愛宕	東海道	水口宿(愛宕さんの祠・愛宕信仰)
⑦ 大溝のカフェ	北国海道(西近江路)	大溝 城下町(高島ワニカフェ)

近江の懐

「懐」とは、衣服に覆われた胸のあたり、その囲まれた空間の意のほか、周りを山などに囲まれた奥深い場所。外界から隔てられた安心できる場所。物の内部、内幕。所持金。胸中、胸の内の考え。などが様々な意味が読み込める。

「近江」は都が造営される以前からいつの時代も歴史の舞台をかたちづくってきた場であり、真ん中に大湖を携え周囲を街道が行き交う交通の要衝である。まさに「日本の懐」と呼ぶにふさわしい場所と言えよう。

このような場で絶えず次の時代を予測し、新たな考えやアイデアを生み出し、受け入れイノベーションを起こす反面、伝統や独自性を重んじ日々工夫し知恵を出し合う。その精神が今日まで受け継がれ持続してきた場に他ならない。そこに現れる一つひとつを取り出していきたい。

まとめ

1.「東海道統一案内看板制作プロジェクト」の試み

・東海道(ストリート)の潜在能力を活かした地域の活性化とその繋がり

2.「近江の懐」取材より

・宿場町の持つ包容力と歴史性に裏付けられた新たな場(プレイス)の展開

から見えてくること

- 自らの問題として捉える。(当事者意識、実践力、自分ゴト)
- 様々な「こと、もの、ひと」への関心と気づき。(潜在能力、探究心、多様性)
- 活動をやめないこと、「続き」をつくること。(継続性、持続性)
- 面倒なところに問題がある。(効率化が全てではない)
- 小さな活動の集まり。(大きな流れや話に乗っかるのはでない)